

## 第9号

# 札幌くらぶ

発行／札幌くらぶ  
 (財)札幌交響楽団内  
 札幌市中央区中島公園1番15号  
 (札幌コンサートホール内)  
 電話 011-520-1771  
 F A X 011-520-1772

## 99年度 札幌くらぶ総会開催 事業計画・予算を承認



99年度札幌くらぶ総会が6月5日午後5時から札幌コンサートホール (Kitara) 2階大会議室で開催されました。

80人を越す会員が出席した中、冒頭、山科会長から「昨年度の総会時点での350名の会員数から、今年度は400名に会員数が増加しており、喜ばしいと思います。今後も地道に、交流会の実施と会報の発行をくらぶの活動の基本にしたい。第1回コンサートを成功裡に終わることができたが、今後については会員の意見をうかがいながら、楽員の皆さんも一緒になって、よりよいコンサートのあり方を模索したい」とのあいさつがあり、用意された議案の審議に入りました。



最初に、98年度の事業報告と決算が上田事務局長から報告され、監査報告後、全会一致で承認されました。続いて、99年度の事業計画案と予算案が審議され、同じく全会一致で承認されました。

この後、第1回コンサートについて、会員の感想や、コンサートに関する質疑・要望をうかがいたいという会長の呼びかけに、約10人ほどの会員から、チケット・曲目・コンサートの趣旨・あり方などに関しての意見や要望が出され、「少し時間をかけて第2回コンサートにむけて検討させてもらいたい」という会長からの回答で総会は終了しました。

総会終了後、昨年同様、出席者は当日の「名曲シリーズ」を楽しんで帰宅しました。

(事業報告等は4ページをご覧ください)



# ソリストにきく

「音楽のあるところが自分の家」

世界で活躍のピアニスト

たてのいずみ  
**館野 泉さん**

尾高さんの札幌に共鳴  
燃えたピアノの詩人!!



## 館野 泉さんのプロフィール

1936年東京に生まれ、60年東京芸術大学ピアノ科卒業。64年よりフィンランドに在住、世界各地で精力的な演奏活動を展開、日本を代表する国際的ピアニスト。メシアンコンクール第2位、フィンランド大統領より獅子第一等騎士勲章を授与され、81年よりフィンランド政府の終身芸術家給与を受けている。長年、フィンランド国立音楽院シベリウス・アカデミーの教授を務めたが、現在は演奏活動に専念、北欧5カ国をはじめ世界各地で、3000回ものコンサートを重ね、世界の多くの国々で深い感動をもって迎えられている。古典から現代まで幅広いレパートリーを持ち、どの分野でも、感性の高さ、洗練度、聴衆を魅了する才能に最高級の賛辞が寄せられている。海外の多くのオーケストラと共演するほか、89年よりフィンランド音楽祭「白夜の国のソリスト達」やオウルンサロ音楽祭の音楽監督、サンクト・ペテルブルグ「白夜祭」に招聘され、91年からは「ノルディックライト SAPPORO」の音楽監督も務めている。96年、日本と諸外国との友好親善への貢献に対して外務大臣表彰を受ける。97年には、国内および世界各地で50回を超えるシュベルト・リサイタルを行なう。リリースされたLP・CDは100枚を越え、繊細な詩情と雄大なスケールに溢れた演奏は、高い評価と人気を得、数多くのファンクラブを持つ。

1999年6月17日、第414回定期演奏会の前日、コンサートホールでの最終リハーサルの直後、ホールの応接室で館野泉さんにお話をうかがうことができました。館野さんから、「インタビューの前に、ノルドグレンの協奏曲を聴いて下さい」との連絡をいただき、私はリハーサルを見て、聴かせていただく恩恵に浴しました。初めて聴くこの曲の素晴らしさに魅せられましたが難曲というよりも「壮絶」というのが私の印象でした。館野さんは、「爪が割れた」と言っておられましたが、指揮の尾高さんとも札幌の方々とも意気投合、心地よい緊張感の中で豊かさに溢れるリハーサルでした。

— お疲れのところお越しいただき有り難うございます。聴かせてもらっておりますと楽しいのですが、演奏される側にとってはとてもタフな曲、ノルドグレンという作曲家とこの曲についてお聞かせ下さい。

館野 ノルドグレンは今56歳のフィンランドの作曲家です。日本に3年ほど住んでいて、奥さんは日本人、大阪の方です。小泉八雲に強く惹かれ、八雲にまつわる多くの作品(「怪談によるバラード」等)を書いております。私はノルドグレンとごく親しくしております。このピアノ協奏曲は彼が31歳(1975年)の時の作品でフィンランド放送協会の委嘱により私が初演することを前提に作られました。その時、私は彼に、「すごい曲ですね、これは。まるで蒙古大襲来、という感じですね」と言った記憶があります。翌年、東京都響との共演で2度目の演奏を日本でやりました。それから23年を経て、今回が3度目の演奏です。つまり私以外の人が弾いたことのない曲です。尾高さんの企画された「札幌の現代音楽シリーズ」にふさわしいものと考え、二人で相談して取り上げました。

この曲の初演の準備の最中に息子(バイオリニストのヤンネさん)が生まれました。この激しい曲を、私の息子は子守歌にして育ったようなもので、思い出に残ります。

— 激しさの中に神秘的な透明な旋律が流れ、宇宙での星の創成やビッグバン、壊れたまま生まれる過程、その途中で静寂が漂う、そのような光景を連想しながら私は聴いております。ちょうどさっきまで、学生に「宇宙の神秘性」の講義をしていたものですから。

館野 たしかにそうですね。ピアノのエレジーの旋律に、透明なバイオリンのソロが加わり、

更にピッコロやいろいろの楽器が複雑に重なり合ってゆく。フィンランドの民族音楽や日本の琴のような音色も現れます。ばらばらのようでいて、ブラックホールに吸い込まれて行くような部分もあります。その移り変わりの中に人間の存在や豊かな時間を感じることができます。

— 今度の札幌の定期では、シベリウスの曲の間に、対照的なノルドグレンが入り、フィンランドの特徴をお楽しみいただけたと思います。

— 館野さんはフィンランドの魅力に惹かれて永住され、フィンランドから「新しい館野音楽」を創造しておられます。そして北欧の国々を拠点に、世界中で精力的な演奏活動をなさっておられます。フィンランドという国の特徴や、芸術文化の点からでフィンランドと日本、あるいは北海道との類似性などについてお聞かせ下さい。

館野 北欧の国々の中で、フィンランドはかなり異なっております。それはほかの国々は西に近い文化圏ですが、フィンランドはあらゆる点で、東と西の境界にあります。つまりこの民族は西からではなく、東から移動してきたのです。ですから言語や文化のみならず、人々の感性や考え方などもかなりちがいます。その点では、フィンランドは日本と類似しております。そして豊かな自然に恵まれているところも同じです。

フィンランドの特徴は、人間が自然と対立したり、自然を利用するのではなく、自然の中に素直に人間が存在する、人間が自然と共生しております。そのような一体化した雰囲気の中からフィンランドの音楽も生まれてくるのです。シベリウスの音楽はそのことをよく表しております。

春を待つ人々の心、乾いた空気と透明感、自然の姿などは北海道にとってもよく似ております。また、私の母は3歳から武蔵野音大に入るまで室蘭に住んでいました。生まれて初めての私の旅行は北海道でした。北海道は大好きです。

— 札幌との共演も長年にわたり数多いと思いますが、最近ではハチャトリアンや伊福部昭の協奏曲、今回はノルドグレン、激しい難曲が続いておりますね。最初のころの札幌との共演の思い出、尾高さんの率いる最近の札幌、そして新しいコンサートホールのことなどをお聞かせ下さい。

館野 札幌とは十数回は共演しております。最初は35年ほど昔のことで、ラフマニノフの協奏曲第2番だったと思います。たくさんの思い出があります。

最近の札幌はコンサートホールにも馴染んで、素晴らしいオーケストラになりましたね。尾高さんの功績も大きいですね。札幌の皆さんが、尾高さんを信頼し、どんな難曲でも余裕をもって、楽しみながら、自らの役割をちゃんと考えて音楽に参加しております。



尾高さんとは、彼のデビュー当時から親しくしていて、東フィルのヨーロッパ公演や、日本でも度々共演してきました。協奏曲というものは指揮者によってこわされることが、よくあります。尾高さんは最高、日本で一番信頼して演奏できる方ですね。今回のノルドグレンの協奏曲はオーケストラにとっても難曲ですが、尾高さんが見事にまとめ、かたくならず、豊かな気持ちで、一緒に楽しみ、燃えながら演奏しております。私も本当に幸せな気持ちで演奏しております。

コンサートホールも、壁の素材が音を吸ってこなれてきて音の分離がよく、でも「おだんご」のようにはならずバランスの良いものになりました。

— 去年はシューベルト・シリーズ、ノルディック・ライト、札幌との共演など、北海道で数

多くの演奏をなさいました。これからの演奏活動などについてお聞かせ下さい。

館野 今年はこのあと、北海道で5回の演奏を予定しております。

これからはタンゴを含めて色々なものを手がけてみたいと考えております。でも、「何をやろう」とか、あまりつきつめるのではなく、おおらかな気持ちで、色々な人の人間性と触れ合い、楽しみながら音楽をつくってゆきたいと思います。世界にはたくさんの優れた才能を持った若い演奏者がおります。こういう人達を仲間に入れ、音楽祭をいくつか企画しております。ひとりでやることも大切ですが、おおぜいの方々と一緒に、いろいろなところ

で、音楽をつくるのがとても楽しいと考えております。

—— 「音楽のあるところ自分の家」、ということですね。ますますご活躍されますように。お疲れのところ有り難うございました。

翌日の本番、ノルドグレン「ピアノ協奏曲」(作品23)、それは素晴らしい熱演でした。鳴りやまぬ拍手、何度も何度もステージにもどされました。尾高さんも、札幌もみんな乗っていました。館野さんの爪は、どんなになってしまったのか、私は心配しております。

(インタビュアー 山科俊郎)

## 1999年度総会報告

1 ページでも報告しました通り、1999年度の札幌くらぶ総会が、去る6月5日札幌コンサートホールの2階大会議室で行なわれました。議案は、98年度の事業報告及び決算報告、99年度の事業計画及び予算それぞれに対する承認を求めるものでした。これらの提案事項につきましては、すべてが全会一致で承認されました。

以下に、98年度事業報告と、99年度事業計画を掲載いたします。

### 1. 98年度事業報告

#### 1) 会報の発行

第6号から第8号までを、各3000部発行し、会員をはじめ札幌のファンと楽員間の情報交換・意思疎通に貢献する活動を展開した。

#### 2) 交流会等の開催

- ・98年6月9日 98年度総会后、総会参加会員86名が「札幌クラシック名曲コンサート」を楽しんだ。
- ・98年11月9日 「尾高さんを囲む会」を開催。会員約70名が参加し、新常任指揮者に就任された尾高さんの人柄と札幌への思いを実感し、交流の実をあげることができた。
- ・99年4月17日 第1回札幌くらぶコンサート後、指揮者渡邊一正さん、司会の竹津宜男さん・丸岡いずみさんも参加され、多くの会員と楽員の交流がもたれた。

#### 3) 札幌くらぶコンサートの開催

98年度総会において決定された札幌くらぶ主催のコンサートを、99年4月17日に実現することができた。会員の協力をえて、1200枚以上の有料チケットを販売し、150名以上の高校生を招待できた。反省点をふまえつつ、第2回コンサートの開催を展望したい。

### 2. 99年度事業計画

#### 1) 会報の発行

年度内4回の発行をめざす。

#### 2) 楽員との交流会の開催

年度中に1回は実現したい。

#### 3) 札幌くらぶコンサート

第2回の開催をめざして準備のための諸活動をする。

#### 4) 札幌定期会員増員への協力

## 札幌物語 X 道内公演



1961年創立の札幌は2001年には40歳になります。公演回数も延べ4,500回を越えることになり、創立40周年の記念事業も考えられることでしょう。

創立11年目の1972年には札幌冬季オリンピックが開催され、その時建てられた真駒内青少年会館はプレスセンターとして使われました。ホールは約600席の座席があり、建設目的が勤労青少年の研修と発表の場と規定されていて、営業行為には使用出来なかったため、オリンピックの後、主に札幌が練習場に使用させていただきました。

日本の他のオーケストラから「札幌の音がきれいなのはホールが練習場なのだから当然」と羨ましがられました。

20年目の1981年には「札幌芸術の森」がオープンし、札幌が優先利用出来る、床面積約500平方メートルの大練習場が出来ました。しかし、天井の高さが8mだったので、音響的にはもう一つでした。

35年目の1996年には、札幌芸術の森に「アリーナ」と呼ばれる可動の客席も700席近くまで用意できる世界有数のオーケストラの練習スタジオに恵まれ、1997年には、目下、世界一音

響の良い、使いやすい、と言われる「札幌コンサートホール Kitara」で定期演奏会を持てるようになりました。

こうして、札幌を取り巻く環境は本拠地札幌で着々と整備され、札幌市民も聴衆として共に成長して来ました。特に札幌コンサートホール Kitaraに定期演奏会の会場が移ってからは、札幌の充実ぶりは素晴らしく、美しい音色と、スムーズなフレージングに耳の肥えた定期会員からも感嘆の声がしばしば聞かれるようになりました。

札幌のホームグラウンドは札幌市と共に北海道全域です。北海道には、札幌以外に211の市町村があり、面積は九州の2倍以上の大きなサイズなのです。しかも、北海道は過疎化の影響でJRの便数が減ったり路線が廃止になったり、と公演地間の移動に苦労することになりました。

札幌事務局は道内の主催者から公演依頼があると、直ちに時刻表とのにらめっこを始めます。次回からは事務局の苦労と演奏旅行でのエピソード等をお楽しみに。

(竹津宜男)

## オーケストラなんでもQ&A

Q. 演奏会の時にいつも感じるのですが、どうして指揮者だけが聴衆に礼をするのですか。楽団員は礼をしてはならないという決まりのようなものがあるのですか。

A. 特別な理由はありません。もちろん、これに関しての決まりのようなものもありません。

習慣的に、指揮者だけがオーケストラを代表して挨拶しています。なお、この習慣はオーケストラだけではなく、合唱団の場合も同じです。

Q. なぜ音楽用語はイタリア語なのですか。英語やドイツ語を使った楽譜はないのですか。

A. バロック音楽から古典派にかけての時代、音楽の中心地がイタリアだったことによります。

モーツァルトも手紙の中で「ドイツ語のオペラを書きたい」と訴えています。

しかし、民族主義運動後は、各国語でも音楽用語が書かれています。

## PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 首席クラリネット奏者

た が のぼる  
多賀 登 さん

札幌に入団するまでは

幼稚園の頃から、オルガン・ピアノと親の勧めで習っていましたが、練習が嫌で、他の楽器に転向したいと考えていた時に、テレビで目にとまったのがクラリネットでした。(リコーダーは学校でやっていて抵抗はなかったです) ととてもいい音で、あれだけキーがあれば飽きることもないだろうと始めたのが小学校4年生の時でした。その後、東京芸術大学へ進み、卒業後3年間ウィーンへ留学しました。この3年間は、いろいろな価値観も変わり、刺激も受けた貴重な経験でした。その後、エキストラなどで演奏していましたが、札幌のオーディションに受かり、初めて札幌に来ることになりました。

演奏旅行についてお聞かせください

道内各地への演奏会には、事故のことなど責任は伴いますが、自由に動けて便利なので、何人かで便乗して車で行くことが多いです。いろいろな宿にも泊まれるし、めずらしい食べ物も楽しみです。過去には、日勝峠で事故の直後に遭遇し、ゲネプロ5分前にやっと到着したというアクシデントもありました。

休日はどのように過ごされますか 趣味で音楽を聴くことはないのでしょうか

休日には散歩をすとか、ボーッとしていることが好きです。最近は庭で野菜やハーブを作ったりもしていますが、札幌には家庭菜園とかそういうことにくわしい人が多いですよ。

音楽は、オペラとか違う楽器の曲を聴くことはあっても、なかなかオーケストラの曲を楽しんで聴くということはできなくなりましたね。どのように演奏しているのかとか気になってしまいますので、限定した聴き方になってしまいます。ただ、生の演奏は刺激にもなりますし、どんな人がどんな演奏をするのか興味がありますので、機会があれば、なる



べく聴きにいくようにしています。

札幌くらぶへひとこと

札幌くらぶには大勢の人に入ってください、どんどん応援をよろしくお願いします。“定期演奏会を2回…” こちらもがんばらなければなりませんね。

札幌交響楽団 ヴィオラ奏者

あら き せい こ  
荒木 聖子 さん

ヴィオラを始めたのは

楽器を習い始めたきっかけは親がバイオリンを好きだったということで、4歳くらいから習っていました。何度かやめたりもしましたが、結局国立音大の附属音楽高校からそのまま大学に入りました。そのころに、何かあったからというのではなく、自然と自分にはバイオリンではなく、ヴィオラだなという感じで転向してしまいました。

札幌へ入団したのはオーディションを受けてですが、オーケストラにもいろいろカラーがあって、札幌は自分に合うのではと先生の勧めもあったからです。

先に兄が札幌の大学にいたため、いろいろ楽しそうな話を聞いていたので、いつかこちらに住んでみたいとは思っていました。でも、実際札幌に住んでから大変だったのは、車を買ってからで、毎年泣きながら(?)雪かきをしています。

ご結婚おめでとうございます 演奏と主婦

業の両立は大変ではないですか

(昨年、チェロ奏者の荒木均さんと職場結婚をなさいました)

正直言って大変です。ずっと一人暮らしをしていましたので、二人になれば楽かなと思いましたが、逆でした。独身時代と違って、いつも時間がないという感じです。二人で同じ仕事をしているので、



マンションに防音室を作りましたが、今は奪い合い状態になっています。

女性はステージ衣装をどのくらい持っているものなのですか

とても個人差があると思いますし、他の方のことはよくわかりませんが、私は黒いブラウスとスカー

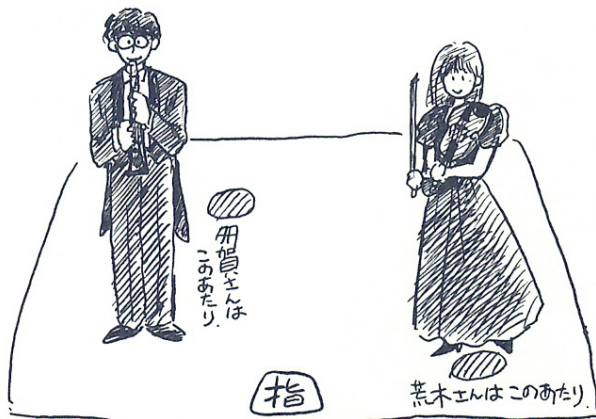
ト、パンツが数枚のほかに室内楽用の衣装があるくらいです。それでも、演奏がしやすいとか気に入っているものは限られますので、普段多く着るものは決まってきますね。入団のときに準備金を少しいただきましたが、あとはすべて自前です。

演奏していて楽しい曲 つらい曲というのはありますか

曲ではあまり好き嫌いはない方だと思いますが、指揮者がどのような人かによって、演奏する気持ちがいいとか、全然違います。やはり、尊敬できる好きな指揮者のときは楽しいものです。

札幌くらぶコンサートはどうでしたか

演奏しているこちらからもお客さんが身近に感じられるコンサートでした。交流会も出席させていただきましたが、とても楽しいひとときでした。あのようなコンサートはこれからもぜひ定期的に継続して開催されるといいですね。



## from 「札幌くらぶ」

おかげさまで、札幌くらぶの会員数が少しふえて、約400名になりました。しかし、私たちの目標にはまだまだ足りません。

札幌くらぶは、「札幌を愛するファンによる札幌応援団」です。活動の目標としていることは、「札幌の定期会員を一人でもふやしたい。そして、出来れば1プログラムで2回の定期演奏会を実現したい。そのようにして、われわれ道産子の宝、札幌を底辺から支えていきたい」ということです。そのために、まず札幌を知ってもらい、聴いてもらい、親しんでもらおうと思ひ、会報の発行、楽員との交流会の企画、コ

ンサートの実施などに取り組んでいます。

難しい入会資格などはありません。年会費の2000円を払って下さる札幌ファンであれば、誰でも、いつでも入会できます。定期演奏会会場で、札幌事務局内で、常時入会受付をしています。ぜひ、仲間にお入り下さい。

お申し込みは

札幌交響楽団内 「札幌くらぶ」へ。

札幌市中央区中島公園1-15

電話 011-520-1771

FAX 011-520-1772

# FAN NETWORK

## はじめて札幌を聴いた日

先日 Kitara で札幌第413回定期を聴きました。「20世紀音楽—同時代セレクションVol.1—1950年代」とタイトルされたコンサートで、ややもするととっつきにくく思われる「現代音楽」をシリーズでとり上げてゆくという、大変意欲的な企画です。

コンサートは、まず、世界に誇る我がタケミツ氏の「弦楽のためのレクイエム」。札幌の弦の美しさがきわ立ちました。続いてヒンデミットのちょっと渋めの大曲「世界の調和」。後半は一転して「これもゲンダイオンガク!?!」と思わせるショスタコーヴィチの「第2ピアノコンチェルト」。野島稔さんのピアノが大変素敵でした。しめは、パーカッションセッション大活躍「ウエストサイドストーリー」の大熱演。それぞれの曲が異なった個性を聴かせてくれた、大変楽しいコンサートでした。

帰路、札幌発10時4分の急行列車の中で、以前札幌でヒンデミットの「画家マチス」を聴いたことを思い出しました。帰って調べてみました。

昭和46年4月6日。札幌市民会館での、北海道放送20周年記念新日鉄コンサートの曲目でした。

当時、北大の学生だった私が、はじめて札幌を聴いたコンサートでした。

無料でコンサートが聴けるという話を聞きつけ、無謀にも、整理券も持たずに会場へ行き、入り口でねばること数十分、恐らく根負けして、入場を許していただけたのだと思います。

指揮はペーター・シュバルツ氏。ウエーバー「オペロン序曲」、モーツァルト「リンツ交響曲」、ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第4番」、そしてヒンデミットという、ドイツの古典から現代までをならべた、大変重厚かつ意欲的な選曲です。ピアノ・ソロは奇しくもこの夜と同じ、若き日の野島稔さん。

北海道にあこがれ、東京から出てきた私にとって北海道で聴く初めてのコンサートでした。札幌は、在京のオーケストラなどと比べても、おせじにも上手とは言えないものの、意欲的な曲目に精一杯チャレンジしているという気迫が伝わってきたように思っています。

その10日後、今度はちゃんとチケットを買って、第105回定期を聴きました。ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」から「前奏曲と愛の死」、ドヴォルザークの「ヴァイオリン コンチェルト」、バルトークの「オーケストラのためのコンチェルト」という、これも大変魅力的なプログラム。ヴァイオリンのソロは何とヨゼフ・スーク氏。札幌の定演にかかる意気込みが感じられます。

それから28年、私はくたびれたオジサンになってしまいましたが、札幌は今も若々しく、しかも力量は目をみはる成長をとげ、国内有数のオーケストラとなっています。定演の会場も、世界的なレベルを誇るKitaraが完成し、まさに隔世の感があります。

札幌が、これからも北海道の大地に根づきつつ国際的に評価されるオーケストラとして、チャレンジ精神を忘れずに更に発展されることを心から願っています。

その意味からも、「20世紀音楽」のシリーズに期待し、楽しみにしているところです。

(美唄 Y・N)

## 原稿募集

FAN NETWORK への原稿を募集。お手紙やFAX その他、事務局へ！ お待ちしています。

## 編集後記

第1回札幌くらぶコンサートの特集のため、8号は予定よりも1か月遅れの発行となりましたが、9号は当初予定通り7月発行を目指しました。そのため、編集期間が短く、原稿が間に合うか心配しましたが、担当の皆様のご協力ですべて無事編集が完了しました。原稿執筆に当たって

くださいました皆様にお礼申し上げます。

今月から始まったPMFも10年目を迎え、様々な記念事業が行なわれるようですが、その中で札幌も中心的な活躍をするようです。ファンとして楽しみに期待したいものです。

(佐藤良次)